

# 懺悔(わんげ) 懺悔(わんげ) 六根清淨(ろくこんじやうじやう)

令和三年三月法話

加藤朝胤

## 悔過(けか)

悔過とは、私たちが生きる上で過去に犯してきた様々な過ち(あやまち)を、本尊とする佛様の前で発露(ほつろ) 懺悔(さんげ) する(告白して許しを請う) こと。

佛教の經典が中国語に翻訳されたとき、古くは「悔過(けか)」と訳されていたが、その後「懺悔(さんげ)」と訳されるようになった。日本では奈良時代には主に「悔過」という言葉が用いられ、東大寺二月堂の「十一面観音悔過」をはじめとして諸寺院で「薬師悔過」「吉祥悔過」「阿弥陀悔過」等が盛んに勤められている。

## 懺悔文(さんげもん)

我昔所造諸悪業(がしやくしよぞうしよあくごう)

私が今までにおかしてきた数々のあやまちは

皆由無始貪瞋癡(かいゆうむしとんじんち)

すべて限らない過去からの、貪瞋癡により

従身語意之所生(じゅうしんごいししよしょう)

私の身体や言葉や思いを通して犯したものです

一切我今皆懺悔(いっさいがこんかいさんげ)

私は今、これらの過ちを、全て残らず告白し許しを請います

『大方廣佛華嚴經 略して華嚴經 懺悔文 普賢行願品』

## 三毒の煩惱(煩惱を毒に喩えて三毒と呼ぶ)

貪欲(とんよく むさぼり)

瞋恚(しんい いかり)

愚癡(ぐち 教えを知らないこと、無知)

人間は無限の過去世から、本来的に貪瞋癡(とん・じん・ち)と呼ぶ煩惱があり、これが原因で身体や言葉や思いを通して様々な間違いを犯しています。これらの罪過の積み重ねが結果として災禍を生み、災禍の原因である過ちを佛様の前で懺悔し、許しを請うことにより、災いの無い世界の実現を受け、幸福を頂く謙虚な心の悔過の作法

このようなことから、僧侶が悔過(けか) 懺悔(さんげ) の行を勤め、罪過を取り除くと共に、四季の恵み、国土の安寧、国民の平和と幸福への願いを讃佛礼拝の行に祈りを捧げるのが、悔過の行法(ぎょうぼう)

懺悔(さんげ)

⑤ Ksama 懺は音訳 悔は意識

初期の佛教教団では、殺人・盗み・姦淫・妄語の四重罪を犯したものは教団から追放されたが、それ以外の罪は大衆の前もしくは一人の個人の前で懺悔すれば許された懺悔とは、それぞれの宗教における神や聖なる存在の前で、罪の告白をし、悔い改めること。自らが犯した罪や過ちを反省し、神佛や相手に許しを請い身心の苦悩から解放を求める宗教行為

佛教における懺悔

自分の過去の罪悪を佛・菩薩・師の御前にて告白し悔い改めること。

懺悔(⑤Ksama)は「忍・堪忍」の意味を持つ。

半月ごとに行われる布薩(⑤uposatha)では僧侶が犯した罪を告白し懺悔する。

僧侶同士が互いに罪を告白しあう自恣(⑤pavarana)という行事もある。

## 六 根 清 浄(ろっこんしじょうじょう)

七佛通誠偈

諸悪莫作(しよあくまくさ) もろもろの悪を作すこと莫かれ

衆善奉行(しゅぜんぶぎょう) もろもろの善を奉じ行ない

自浄其意(じじょうごい) 自らその意を浄くする

是諸佛教(ぜしよぶつきょう) これが諸佛の教えなり

どのような悪業を行うこともなく、様々な善業を行い、自らの行動により自らの心を浄らかにする、それが佛がみな口を揃えて説く教えの基本です

『出曜経』『法集要頌経』

布施の実践

三輪清浄(さんりんしじょうじょう)

菩薩の布施 布施をする人 布施をする物 布施を受ける人

若し善男子善女人この法華経を受持し、若しは読み、若しは誦し、若しは解脱し、若しは書写せば、この人は正に八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德 千二百の意の功德を得べし。この功德を以て六根を莊嚴して皆清浄ならしめん。

『法華経第六法師功德品』